

月を忌む——その源流——

三浦 真貴

「月の顔見るは、忌むこと」これは月を見て嘆くかぐや姫に対してかけられる竹取物語中の言葉であるが、この認識は『竹取物語』の登場人物で、かぐや姫以外の人々、つまり一般的な当時の日本人が持っていたものであろうと考えられているが、平安時代已に愛でる対象というイメージの強い月であるのに、何故『月を忌む』のかという議論が多くの先人によってなされており、まず白居易の『白氏文集』巻十四にある「贈内」に起因するというもの、月経を忌むものからというもの、月の満ち欠けから生死を連想してというものなどがある。では、それぞれの説を考察しつつ、「月の顔見るは、忌むこと」という禁忌を解き明かしていきたい。

最も有名な説が白居易由来説である。これは白居易の

贈内

内に贈る

漠漠閨台新雨地  
微微涼露欲秋天  
莫對月明思往事  
損君顔色減君年

漠漠たる閨台 新雨の地  
微微たる涼露 秋ならんと欲する天  
月明に對して往事を思ふ莫れ  
君が顔色を損じて 君が年を減ぜん

(『白氏文集』巻十四)

という漢詩の第三、四の句より、月を見ると年を取る、だから見るなという考えが『白氏文集』伝来と共に日本に伝わり、月を忌む思想が出来たというものである。

熊谷直春氏は白居易由来説の根拠を三つあげて、その論が正しいことを説明している。長文ではあるが引用する。

第一にかぐや姫の側にいる人が、「月の顔見るは、忌むこと」と注意したのは、かぐや姫が、「月のおもしろいであつたを見えて、つねよりも、物思ひたるさま」であつたことである。単に、月を眺めていたからではない。思い悩むことが伴つていたからである。このことは、使われている人びとの「かぐや姫、例も月をあはれがりたまへども、この頃となりては、ただごとにもはべらざめり。いみじく思し嘆くことあるべし」や、翁の「月な見たまひそ。これを見たまへば、物思す気色はあるぞ」の心配にも現れている。傍線部の「月を見ること」は「対月明」に、波線部の「思い悩むこと」は、「思往事」に対応しているのであつて、作者が「月の顔見るは、忌むこと」の禁忌が、『白氏文集』の「莫對月明思往事」に由来することを知っていたと思わざるをえない。

第二に、かぐや姫が「月の顔」を見て思い悩むことである。

「七月十五夜の月にいでゐて、せちに物思へる気色なり」、「なほ月いづれば、いでゐつつ嘆き思へり」、「八月十五日ばかりの月にいでゐて、かぐや姫、いといたく泣きたまふ」、「日頃も、いでゐて……かく嘆きはべる」などと表現されている。かぐや姫が、家の中でかすかに月を見たとか、光を受けたとかいうのではなくて、「いでゐて」、つまり縁に出てすわって、まさしく「月の顔」を見ていた事になっている。(中略諸注釈書の多くは、「月明」を月の光の意味にとっているが、「対月明」という表現からすれば、白楽天は、最後の「月の明るいこと」、つまり明るい月の意味で使っているのであらう。(中略やはり作者は、「月の顔見るは、忌むこと」の禁忌が、『白氏文集』の詩句に由来することを知っていて、『莫對月明思往事』の意味を正確に読み取っていたのである。

第三に、かぐや姫が「かの都の人は、いときよらに、老いをせずなむ。思ふこともなくはべる」月の都の人として描かれていることである。(中略作者は、側にいる人に「月の顔見るは、忌むこと」と言わせただけで、当時の読者であれば、禁忌の理由「莫對月明思往事」を十分知っているから、「かたちのきよらなること世にな」いかぐや姫が、容貌を損ない、老けるかもしれないと、はらはらしながら読み進むことを計算しているのであらう。

さて、この熊谷氏の論に反論するにあたって、まず「忌む」という言葉の意義を考えたい。「忌む」という語は主に、信仰に基づく習慣として禁忌と考えられていた行動に対して使われている語で、例えば死・産褥・血などの『穢れ』を「忌む」、本名はその人そのものの根本であり、それを知られた相手の支配下に入るといふ思想からの「忌み名」、穢れを避ける「物忌み」、「方忌み」などの陰陽道の思想などで使用されるものが上げられる。では、白居易の「贈内」で

の「月を見て悩むと年を取る」、という詩句は「忌む」という言葉でもって禁止されるようなことなのであろうか。中国において、「月を見て悩むと年を取る」というものが信仰によるもの、または思想で存在していたならば「忌む」が使われることも納得できるのであるが、中国では古代より月は嫦娥という仙女や蟾蜍、兎の住む天界の一部であり、また月は不老不死の薬との関わりの深いものであり、老けるといった思想は見られない。また、白居易自身だけではなく、

同時代の詩人たちも月を見て愁う詩を詠んでいることから「月を見て悩むと年を取る」という信仰は無かったと思われる。

また、白居易の詠んだ漢詩を見れば白居易の月の捉え方を見る事ができる。

中秋月

萬里清光不可思

添愁益恨遠天涯

誰人隴外久征戍

何處庭前新別離

失寵故姬歸院夜

沒蕃老将上樓時

照他幾許人腸斷

玉兔銀蟾遠不知

中秋の月

萬里の清光 思ふべからず。

愁ひを添へ恨みを益して 天涯を遶る。

誰人か 隴外に 久しく征戍す、

何處か 庭前に 新たに別離す。

寵を失ふ故姫 院に帰る夜、

蕃に没する老将 樓に上る時。

幾許をか照他して 人腸断たん、

玉兔 銀蟾 遠くして知らず

(『白氏文集』卷十一)

獨眠吟二首その二

獨眠に吟ずその二

獨眠客

夜夜可憐長寂寂

就中今夜最愁人

涼月清風滿牀席

獨眠の客

夜夜憐む可し 長く寂寂たり

就中 今夜 最も人を愁へしむ

涼月 清風 牀席に滿つ

(『白氏文集』卷十八)

倣陶潛詩十六首その六

天秋無片雲 地靜無纖塵

團團新晴月 林外生白輪

天秋にして片雲無く 地靜かにして纖塵無し

團團たる新晴の月 林外白輪を生ず

倣陶潛詩十六首その十一

煙霞隔玄圃 風波限瀛洲

我豈不欲往 大海路阻脩

煙霞玄圃を隔て 風波瀛洲を限る

我豈に往くを欲せざらんや、大海路阻つて

脩し

憶昨陰霖天 連連三四句

賴逢家醞熟 不覺過朝昏

私言雨霽後 可以罷餘樽

及對新月色 不醉亦愁人

牀頭殘酒榼 欲盡味彌淳

攜置南簷下 舉酌自殷勤

精光入盃杓 白露生衣巾

及知陰與晴 安可無此君

我有樂府詩 成來人未聞

今宵醉有興 狂詠驚四鄰

獨賞猶復爾 何況有交親

憶ふ昨陰霖の天 連連たり三四句

家醞の熟するに逢うに賴りて 覺えず朝昏を過ぐす

私に言ふ雨霽れて後 以て餘樽を罷む可しと 新月の色に対するに及び 酔はずんば亦た人を愁へしむ

牀頭殘酒の榼 盡きんと欲して味彌淳し 南簷の下に攜へ置き、舉げ酌むこと自ら殷勤 精光盃杓に入り 白露衣巾に生ず 及ち知る陰と晴と 安んぞ此君無かる可けんや

我に樂府の詩有り 成り來りて人未だ聞かず 今宵酔つて興有り、狂詠四鄰を驚かす 獨り賞するも猶ほ復爾り、何ぞ況んや交親有るをや

(『白氏文集』卷五)

神仙但聞説 靈葉不可求

神仙は但だ説のみを聞き 靈葉は求むべからず

長生無得者 舉世如蜉蝣

長生は得る者無し 世を擧げて蜉蝣の如し 逝く者は重ねて廻らず 在する者は久しく

逝者不重廻 在者難久留

留まり難し

踟躕未死間 何苦懷白憂

踟躕して未だ死せざる間 何を苦しんで白憂を懷く

念此忽内熱 坐看成白頭

此を念うて忽ち内熱し 坐ながら白頭と成るを見る

舉盃還獨飲 顧影自獻酬

盃を擧げて還た獨り飲み 影を顧みて自ら獻酬す

心與口相約 未醉勿言休

心口と相約す 未だ酔はざるに休めよと言ふ勿れと

今朝不盡醉 知有明朝不

今朝酔を盡さず 知明朝有りや不や

不見郭門外 疊疊墳與丘

見ずや郭門の外 疊疊たる墳と丘と

月明愁殺人 黃蒿風(風偏に叟)(風偏に叟)

月明かり人を愁殺し 黃蒿風(風偏に叟)(風偏に叟)たり

死者若有知 悔不秉燭遊

死者若し知る有らば 燭を秉つて遊ばざりしを悔いん

(『白氏文集』卷五)

舟夜贈内

舟夜 内に贈る

三聲猿後垂鄉淚

三聲の猿後 郷淚を垂れ

一葉舟中載病身

一葉の舟中 病身を載す

莫凭水窓南北望

水窓に凭れて南北を望むこと莫れ

月明月闇總愁人

月明らかなるも月闇きも 総て人を愁へしむ

(『白氏文集』卷十五)

こうしてみると、白居易は月、特に秋の月を「人を愁へしむ」存在だと考えていたことが分かる。また、「倣陶潛体詩十六首その十一」では、はつきりと悩むと白髪になる、つまり老けると詠じている。

これを踏まえて考えると、「贈内」も季節は秋であり、「月明に對して往事を思ふ莫れ 君が顔色を損じて 君が年を減ぜん」は、月を見て悩む妻に對して、それではより悩みが深くなる、悩みすぎると

老けるよ、とそのような意であるように思われる。吉田隆英氏の指

摘するとおり、当時の唐では女性の月見は忌むどころか新月を拝む会を催し、月に對して長寿や容色が衰えないようにと祈っていたという風習が存在し、その考えは『菅家文章』の「新月二十韻」という詩でも表現され、確実に日本に伝わっていた。さて、話を戻して菅原道真が詠じた秋天月という漢詩は、腸断ゆるなどの詩句から白居易の「中秋月」を踏まえている事が窺えるが、やはり道真も秋の

月は愁いを増すものだと思われているように思われる。

秋天月

秋天の月

千悶消亡千日醉

千悶消亡す 千日の酔ひ

百愁安慰百花春

百愁安慰す 百花の春

一生不見三秋月

一生に三秋の月を見ざらませば

天下慶無腸断人

天下に腸断ゆる人無からまし

(『菅家文章』卷二)

また『古今和歌集』卷十七・雑歌上に在原業平の歌として収録され、また、『伊勢物語』八十八段に「むかし、いと若きにはあらぬ、これかれ友だちとも集まりて、月を見て、それがなかにひとり」という前書き付で記されている歌で

大方は 月をもめでじ これぞこの 積もれば人の 老となるもの

訳・一般的には(愛でる月であるが)私は愛でませんよ、このことが積もり積もれば人の老いとなりますから

というものがあ、熊谷氏は

『伊勢物語』によれば、この場合も月の宴の最中に作られており、業平も「友だちども」も「月の顔見るは、忌むこと」などには意に介していないようである。したがって、業平の歌は、俗信に基づいているのではないのであって、『白氏文集』の詩句にあるいは詩句が俗諺となつてゐるのを機知の材料に使つて座興の一首に仕立ててゐるのである。

と、述べておられるが、この和歌と『竹取物語』の成立は近いと考えられ、一方では「忌む」という言葉で禁忌と考えられ、一方では座興で使われるというような差が出るものであろうか。この業平の和歌は山下春美氏の

月を鑑賞したが、これがつもりつもれば人は老いるという、空にある月と、時間的な月を重ねて、「老」を詠んでいる。

という見解が正しいように感じる。『伊勢物語』の前書きを見る限り、業平は友だちと月見の宴を楽しんでいるのであり、熊谷氏が指摘しているところの「思往事」は抜けているのである。

『白氏文集』を竹取物語作者が深く理解していたとするならば、白居易が秋の月は愁いを増すものと捉えていたことも理解できていた事となり、よつて「贈内」一首により「月の顔見るは、忌むこと」という文句になるとは考えられないのである。

もう一つの説が『和歌文学の世界』に収録されている市村宏氏の月経を忌むものからというものである。市村氏は

古代の女性はすべて夫の妻である前に神の妻であった。司祭や酋長が神権者として新夫に先立ち行使する初夜権といわれる奇習は、そのことの名残だし、結婚後も女性は毎月神と交る期間を持つてその間夜を夫と離れ、忌み籠りして他家に起居し、別火の生活をしたのである。その間夫といえども妻の顔さえみるを許されぬのである。(中略)「月の顔は見るを忌む」とはもともこのことを指したのではあるまいか。この諺は長く伝えられて王朝時代にも及んだが、その本来の意味の一つが忘れられて、空に照る月しか考えられなくなった

とし、

という古事記の記事と和歌三首をあげて、ここで記されている月は月経のことであり、和歌三首はそれぞれ月経中のため妻と逢えないこと、結婚できないことを歌っているとされている。しかし、これに対し李家氏は「つきのもの(月経) 月水は、肉体のもので、語源は肉月の月であるから、天界の月とは直接に関係するものではない」とし、また熊谷氏も「そのような由来であるならば、「月の顔見るは、忌むこと」は女性ではなくて男性に適用されていいはずであるが、男性は盛んに月を眺めているし、『竹取物語』のかぐや姫の例でわかるように、俗信としての禁忌は女性に適用されている」と反論している。さらに、『日本古典文学大系 古事記』の注では、引用部の二首の和歌について「ここは月経の血がついているのを、新月が現れたのに譬えたのである」、「新釈 古今和歌集」下巻には、一〇九二番歌の注は

「その月が忌み月だったのであろう。源氏物語では、玉鬘の出仕を九月にすることを忌んで、「月たゝば、なほ、参り給はむこと、忌みあるべし。十月ばかりにと、おぼしの給ふを」(藤

爾に美夜受比売、其れ意須比の欄に、月経著きたりき。故、其の月経を見て御歌曰みしたまひしく、

ひさかたの 天の香具山 利鎌に さ渡る鵠 弱細 手細腕を 枕かむとは 我はすれど さ寝むとは 我は思へど 汝が著せる 襲の裾に 月立ちにけり

とうたひたまひき。爾に美夜受比売、御歌に答へて曰ひしく、  
高光る 日の御子 やすみしし 我が大君 あらたまの年が來経れば あらたまの 月は來経往く 諾な諾な諾な 君待ち難に 我が著せる 襲の裾に 月立たなむよといひき。故爾に御合したまひて、其の御刀の草那藝劍を、其の美夜受比売の許に置きて、伊服岐能山の神を取りに幸行でましき。

(『古事記』景行記)

二上に隠らふ月の惜しけれども妹が手本を離るるこのころ

(『万葉集』卷十一・二六七六)  
小筑波の嶺ろに月立し間夜はさはだなりぬをまた寝てむかも

最上川のぼればくだる稲舟のいなにはあらずこの月ばかり

(『古今和歌集』卷二十・一〇九二)

袴とあるし、薫が浮舟を宇治に移そうとしたのが九月であったため、乳母や女房たちは不吉に思い、「九月にもありけるを、心憂のわざや。いかにしつる事ぞと嘆けば、尼君も、いと、いとほしく、思ひの外なることなれど」(東屋)ともある。また、宇津保物語には、真菅が、あて宮との結婚を殿守に依頼する場面に、「人のいましむる五月は去ぬ。今はかの事なし給へ」(藤原の君と見えている。これによれば、九月・五月は、祝事や結婚には忌まれていたことが知られる。五月は田植え時であり、九月は刈り入れ時で、いずれも「稲舟」と関係があるが、「稲舟」を稲を積む舟と解する時、この歌は、九月のことと解するのが自然であらう。

と、月経であることを否定している。

もし、月経中の女性の顔を見ることを忌むのであれば、『古事記』での記事のように贈答歌に詠みこまれる事は不自然であるし、平安時代に入っても内裏において月経中の女房等は里下がりをして忌み籠もっていたように、はつきりと月経を忌む習慣は連綿と続いていたのであるから、市村氏の「本来の意味の一つが忘れられて、空に照る月しか考えられなくなった」というのも、やはり納得できない。

やはり、「月の顔見るは忌む」は、古代からの月を死の世界と見る信仰からであろう。『竹取物語』かぐや姫昇天の段において、竹取の翁が月へ帰るといふかぐや姫に対して「我こそ死なめ」と泣くことも、月に行く＝死ぬ事と考えている証拠である。また、源氏物語などの平安中期の文学作品においても月と死、または霊との関りを幾つも見出すことが出来る。

①夕月夜のかしきほどに出だし立てさせたまひて、やがてながめおはします。かうやうのをりは、御遊びなどせさせたまひしに、心ことなる物の音を掻き鳴らし、はかなく聞こえ出づる言の葉も、人よりはことなりしけはひ容貌の、面影につと添ひて思さるるにも、闇の現にはなほ劣りけり。(『源氏物語』桐壺)

②御墓は、道の草しげくなりて、分け入りたまふほどいとど露けきに、月も雲隠れて、森の木立木深く心すこし。帰り出でん方もなき心地して拝みたまふに、ありし御面影さやかに見えたまへる、そぞろ寒きほどなり。「なきかげやいかが見らむよそへつつながむる月も雲がくれぬる」(『源氏物語』須磨)

⑦もの思ひまさる秋の世も、はしに出であてながめれば、いとど、月やいにしへほめてけむと、見えたる有様をもよほすやうにはべるべし。世の人の忌むといひはべる鳥をも、かならずわたりはべりなむと、はばかりれて、すこしおくにひき入りてぞ、さすがに心のうちにはつきせず思ひつづけられはべる。(『紫式部日記』)

⑧その十三日の夜、月いみじく隈なく明きに、みな人も寝たる夜中ばかりに、縁に出であて、姉なる人、空をつくづくとながめて、「ただ今ゆくへなく飛びうせなばいかと思ふべき」と問ふに、なまおそろしと思へるけしきを見て：(『更級日記』)

⑨形見にとまりたる幼き人々を左右に臥せたるに、あれたる板屋のひまより月のもり来て、児の顔にあたりたるが、いとゆゆしくおぼゆれば、袖をうちおほひて、いま一人をもかき寄せて、思ふぞいみじきや。(『更級日記』)

『源氏物語』の例では、④を除く全てで月と共に死者の霊の存在が匂わされている。①では桐壺更衣、②③では桐壺帝、⑤では藤壺、⑥では柏木である。②では、源氏は月を桐壺帝に例えているし、③

③飽かず悲しくて、御供に参りなんと泣き入りたまひて、見上げたまへれば、人もなく、月の顔のみきらきらとして、夢の心地もせず、御けはひとまれる心地して、空の雲哀にたなひけり(『源氏物語』明石)

④「冬夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、あやしう色なきものの身にしてみて、この世の外のことまで思ひ流され、おもしろさもあはれさも残らぬをりなれ。」(『源氏物語』朝顔)

⑤月いよいよ澄みて、静かにおもしろし。(中略)入りたまひても宮の御方を思ひつつ大殿籠れるに、夢ともなくほのかに見たてまつるを、いみじく恨みたまへる御気色にて、「漏らさじとのたまひしかど、うき名の隠れなかりければ、恥づかしう。苦しき目を見るにつけても、つらくなむ」とのたまふ。(『源氏物語』朝顔)

⑥「なやましげにこそ見ゆれ。いまめかしき御ありさまのほどにあくがれたまうて、夜深き御月めでに、格子も上げられたれば、例の物の怪の入り来たるなめり」(『源氏物語』横笛)

では桐壺帝が源氏の前から姿を消して気付くと、「月の顔のみきらきら」とより月の存在が強調されている。

④は霊とは少し違うが、澄んだ月を見ていると「この世の外」が思いやられる、つまり来世やあの世に考えが及ぶのである。⑥⑦でははつきりと月を見ていることは不吉、の理由が述べられている。⑥では、月を見るために格子などをすつかり開けていたから物の怪が来たのだ、⑦では月を見ていると世の人の忌むという鳥諸本では咎がわたってくるから憚られる、というものである。ここでの鳥は何の鳥であるかは不明であるが、「死出田長」と呼ばれる不如帰という説がある。この鳥が咎という可能性があるにしても、月を見ていると不吉な「何か」がやってくるという考えが窺える。⑧は、はつきりと死が見えるわけではないが、月を見ていたときに孝標娘の姉が「今私が飛び失ってしまったらどうする」という間に孝標娘が「なまおそろし」と思っているところでも、天女説話の昇天のイメージで述べられているのではないことが推測できる。また⑨は孝標娘の姉が産褥死した日の夜の記述であるが、児の顔に月光があたるのが「いとゆゆし」き事なのである。

古代日本人が月を死後の世界と捉えていたと考えられる証拠は福

岡県の珍敷塚古墳や、五郎山古墳、鳥船塚古墳、熊本県の弁慶

が穴古墳などの壁画から見ることが出来る。特にはっきりと現れているのは珍敷塚古墳で、太陽の照る側(現世)から月の照る側(死者の世)へと舟で向かっているさまが描かれている。月の側には蛙が描かれており古代中国の神話との重なりも見受けられる。また、『舟』というものは月と死者の世界の繋がりを考える上で一つの大きな焦点である。

万葉歌の中に夜空を海に、月を舟、または船に乗った男に例える歌が見られる。

天海丹 雲之波立 月船 星之林丹 榜隠所見

天の海に 雲の波立ち 月の舟 星の林に 漕ぎ隠る見ゆ

(万葉集 巻七 一〇七二)

海原之 道遠鴨 月読 明少 夜者更下乍

海原の 道遠みかも 月読の 明かり少なき 夜はくたちつつ

(万葉集 巻七 一〇七九)

天海 月船浮 桂梶 懸而滂所見 月人壮子

天の海に 月の船浮け 桂梶 懸けて漕ぐ見ゆ 月人壮子

(万葉集 巻十二・二二七)

天の海へと続く海の道のように見えたのではないか。万葉集巻十六、恐ろしいものの歌で、ささらの小野の歌の次にある歌

沖津国 うしはく君の 塗り屋形 丹塗りの屋形 神の門渡る

(万葉集 巻十六・三八八八)

この沖津国は死者の国を指し、うしはく君は異訓で治せし君で死者の国を治める神を指す。つまりこの歌は死者の国の神が丹塗りの屋形船(喪船か)で神の戸という海峡を渡ると解釈されている。この『神の戸』こそ、根の国への入り口であり海と天の海との境界ではないだろうか。実際、死者の国に行くには舟が必要と考えられていた証拠に三世紀頃より船形の石棺や木棺が多数存在し、全国より出土している。昼間の天は、天照の治める『原』であり、夜の天はツクヨミの治める『海原の潮の八百重』とも言えるのではないか。『皇太神宮儀式帳』においてツクヨミは紫の衣を着て、金の太刀を佩き、馬に乗った男の姿であるとされている。舟と馬ではかなり乗っているものが異なるが、どうやら無関係ではないらしい。古墳壁画の中には舟の上に馬が乗っているものや、騎馬をした図柄がいくつもあ

る。つまり馬も舟と同様魂を死者の国へ運ぶものであるらしい。古墳で示される騎馬をした人物は葬られた人物であるとする説が主流

於保夫弥尔 麻可治之自奴伎 宇奈波良乎 許芸旦天和多流  
月人平登  
大船に 真楫しじ貫き 海原を 漕ぎ出て渡る 月人壮子

(万葉集 巻十五・二六三三)

記紀において、異界との往来をする乗り物は『舟』であった。スクナヒコナは『日本書紀』では白敝皮舟、『古事記』では天之羅摩舟で海を渡り葦原の中つ国に、タケミカツチは記で天船鳥と共に高天原から中つ国へ、山幸彦は紀では無目籠舟、記では無間勝間舟中つ国から海神宮へ渡った。『摂津風土記』でも天探女は高天原から中つ国に天磐舟に乗りやつてきた。この天磐舟は先代旧事本紀でもニギハヤミが乗っていたとされる。具体的に何処へとは分らないが、蛭児も葦舟、天磐櫓樟船、鳥磐櫓樟船と船で流されている。このように、古代において船は天や海を渡る特殊なものであり、『月舟』も異界へと渡るものであると考えられる。珍敷塚古墳や、五郎山古墳の図の舟の周りには星を表す点が数多く打たれ、夜を表現しているにほかならない。思うに、現在のように電気が存在しない当時、夜の海を陸地から眺めた場合、または船上から陸地を眺めた場合、昼間と違いその境界が明瞭ではなかった。はつきりしていたのは星と月と海面に反射する月明かりだけであり、海面に煌く光はあたかも

であるが、ツクヨミである可能性もまったくないとは言えないのではないか。ここで改めて考えなくてはならない事は記紀において死の国である『根の国』を治めているのはツクヨミではなくスサノオであるということである。この問題を次の歌から考えて見たい。

山葉 左佐良履壮子 天原門 度光 見良久之好藻  
山の端の ささらえおとこ 天の原門 渡る光見らくよし  
くも

(万葉集 巻六・九八八)

右一首歌。或云。月別名曰左散良衣壮士也。縁此辞作此歌。

右の一首の歌、或いは云う。月の別名をささらえおとここという也。これによりてこの歌を作る。

記紀において、ツクヨミノミコトは海、潮位の神だとされているが、同時にスサノヲノミコトも海原又は滄海原を治めるようにと記されている事に気付く。また保食神殺害においても、記のスサノヲ、紀のツクヨミ、そして殺される保食神の名前こそ違えど語られている話はほぼ同一のものである。

このように、ツクヨミノミコトとスサノヲノミコトの類似点はツクヨミノミコトの記述の少なから考えると非常に多い。この二柱の神の類似により、ツクヨミノミコトとスサノヲノミコトは、元は

同一の神であつたという説があるが、私もこの説を支持する。  
さてこの説を考えていくにあたり、原始月神の名前にも関つてくる話であるが、興味深い歌がある。

山葉 左佐良榎壮子 天原門 度光 見良久之好藻

山の端の ささらえおとこ 天の原門 渡る光見らくよくも

(万葉集 卷六・九八八)

右一首歌。或云。月別名曰左散良衣壮士也。縁此辞作此歌。

右の一首の歌、或いは云う。月の別名をささらえおとこという也。これによりてこの歌を作る。

この歌と注記について橋純一氏は<sup>〔十五〕</sup>

この語(ササラエオトコ)を用いているのは、大伴坂上郎女(旅人の妹)であるからさして古い歌とはいえないが、此の語は他に例が無いから、當時既に古語に属していたのを、此の女流歌人が何かの機会に聞き知つて用いて見たのかも知れぬ。左註で、それが月の異名なることを解説しているのもこの語の意義が當時一般の人々には、もはや忘れられていたためではあるまいか。

と述べている。この、『ササラエオトコ』という呼び名が転じて『スサノヲ』となったというのがツクヨミ・スサノヲの説の要旨であるが、これについて検証していきたいと思う。

まず、ツクヨミの出生であるが、ツクヨミは全ての記述において日神の対として生まれている。だが、ツクヨミは表記の違いこそあれど、『月読』、『月夜見』、『月弓』など呼び名が基本的にはほぼ『ツクヨミ』と同じであることに對し、日神は『天照大神』、『大日靈貴』、『大日靈尊』と全く違ふ名が記されている。ここでどの記述においても對の存在とされていた日と月において、一方だけが異稱を持っていたとは考えにくい。おそらくツクヨミ・ミコトも天照のようにもう一つの名前を持っていたと考えられる。それは恐らく、ツクヨミ・ミコトと名付けられる前の名であろう。

さて、この『ササラエオトコ』の『ササラ』とは何処から來たのであろうか。橋氏はこの『ササラ』は万葉集に見える、天なる左佐羅能小野によるとされている。

なゆ竹の とをよる御子 さ丹つらふ 我が大君は こもりく  
の 泊瀬の山に 神さびに 斎きいますと 玉梓の 人ぞ言ひ

天なるは天上にあるひめすが原也。然らざれば、髪に芥のつくといふ事よしなし。是は、天なるささらのをを野のたぐいにて、ただまうけて言うのみと言えり。此説によるべし。

とあり、天なるささらの小野と天なるひめすが原の関りを指摘している。ここで、菅原と小野というどのような土地かを表わす語を抜いて『日売』と『左佐羅』だけで考えてみる。天に於いての『日』といえは、天照であり、それが女神であるとされていることは周知の事である。橋氏は『大日靈(オオヒルメ)』のヒルメは元はヒメであり、身分の高い娘を呼ぶ時にここから比売や媛になったため、原義の日神と媛を区別するために日神を指す『ヒメ』を『ヒルメ』としたのではないかとされている。とすると、『日売菅原』は日神が治める原と考えられ、その対である『左佐羅小野』は月神が治めていたと考えられるのである。これは九九八番歌で『ササラエオトコ』を月神という意で使用していることを思い出せば、よりはつきりする。また、日本書紀のいくつかの記述に於いて、日神・月神が天を並んで治めよという部分とも合致する。つまり、大日靈は天照の、左佐良男(ササラエオトコ)の父は親愛の意で付加されたものなので除くはツクヨミの古い名と考えられる。

ツクヨミ素戔鳴を考える上で、注目したいのは第七段であるが、これは有名な天石窟(天岩戸)が記されている段である。素戔鳴の暴

つる およずれか 我が聞きつる たはことか 我が聞きつる  
も 天地に 悔しきことの 世間の 悔しきことは 天雲の  
そくへの極み(天地の 至れるまでに 杖つきも つかずも行  
きて 夕占問ひ 石占もちて 我がやどに みもろを立てて  
枕辺に 斎瓮を据え 竹玉を 間なく貫き垂れ 木綿たすき  
かひなに懸けて 天なる ささらの小野の 七節菅 手に取り  
持ちて ひさかたの 天の川原に 出で立ちて みそぎてまし  
を 高山の 巖の上に いませつるかも(万葉集 卷三・四二  
三)

天にあるや ささらの小野に 茅草刈りばかに 鵜を立つも

(万葉集 卷十六・三九〇九)

この『天なるささらの小野』と似た表現で『天なる日賣菅原』という語が同じように万葉集で歌われている。

天にある 日賣菅原の 草な刈りそね 蟬の腸か黒き髪に芥し付くも

(万葉集 卷七・二二八二)

この歌に関して、『万葉集略解』註で本居宣長は、



虐な振る舞いに立腹した天照が天石窟に隠れてしまい、昼夜の別がなくなってしまった。それに困った神々は様々な策を廻らせて天照を天石窟から出し、素戔鳴は追放される。これが大筋であり、古事記でも大きな差異はない。この天石窟説話について新編<sup>（一）</sup>日本古典文学全集では、日照時間の最も短い冬至の自然説話と注しているが、私は大林太良氏の日蝕説を支持する。昼夜の別がなくなるほど夜が長い冬至は北極圏などの一部地域で極夜として起こりうるが、神話が構築されたであろう緯度の小さな西日本での冬至は、太陽が隠れる、と描かれるだろうか。日蝕は太陽を月が隠すことで起こるが、当時の人々が太陽を覆い隠すものを月であると認識していたかは不明である。しかし、太陽は昼間にしか姿を現さないのに対し、月は昼間でも姿を見せ（宵月夜といわれる期間）、また天に浮かぶ太陽を覆い隠せる大きさのものは月しかない。

夜の存在である月神が昼間という天照の支配世界にも現れるのは、素戔鳴として描かれる月神の、天照の治める高天原（<sup>（二）</sup>）への侵害強いては暴虐の振る舞い、と捉えられることはなかっただろうか。月によって害された太陽は日蝕であり、日蝕の終りの、まさに戸が開いていくように太陽光が現れる様子は天石窟の説話の天照の具現そのものである。

今私は永遠に去ろうとしている。どうして姉に会わないまま降りられようか」と言つて、また天に昇つてきた。（この後は第六段で語られている宣誓をして悪意がないことを証明した後、すぐに根の国へと赴いている）。

以上が要約であるが、まず第三の一書は、他の第六段↓第七段の流れではなく、第七段↓第六段という話の順が逆になっているのが見て取れる。つまり第三の一書だと素戔鳴は最初から高天原にいたことになっているのだ。その証拠に素戔鳴が天を治めるべしとはどの三貴神誕生話を見ても無く、また高天原を訪れたとしてもそれは根の国へ行く前の一時的な立ち寄りであるにもかかわらず、天安田、天平田、天邑併田という自分の田を持っている点は不自然である。このこの段の天照の田と素戔鳴の田を対に描かれているのを見ると、前節に出てきた『天なるささらの小野』『天なる日賣菅原』を思い出せはしないだろうか。推測するに、この第七段第三の一書が天石窟説話の最も古い形なのではないだろうか。素戔鳴をツクヨミに置き換えてみていくと更に分かりやすい。

日神（ヒルメ）は高天原に良田を三つ、月神（ササラヲ）は悪田を三つもつていた。それを恨んだ月神は日神の田を荒らし、暴虐な振る舞いで傷つけた。月神の暴虐により日神は隠れ（月による日蝕）、世

この第七段で最も注目したいのは第三の一書である。これは正文第一、第二とは話の流れがかなり違う。正文などに示される話の流れは高天原に上がつてきて天照と宣誓をした後無罪を証明した素戔鳴は天に滞在し、乱暴な行動を起こす。それにより怒った天照が天石窟に籠もり、素戔鳴は神々により追放されるという前述したとおりのもののだが、では第三の一書はどのようなかを詳しくみていこう。

日神は三箇所の御田を持っていた。天安田、天平田、天邑併田といい、全て良い田である。長雨や日照りでも損なわれることがなかった。素戔鳴の御田も三箇所あった。天織田、天川依田、天口鋭田といい、全て痩せ地であった。雨が降れば流れ、日照りになると干上がった。これを恨んだ素戔鳴は天照の田を荒らした。だから天照はこれを許した。（中略。以下素戔鳴のさらなる暴虐から天石窟、天照が現れるまでは正文と同じ流れ）

素戔鳴は神々から「お前は高天原にも、葦原中つ国にもいてはいけない。早々に根の国に行け」と追放される。その時長雨が降つていて素戔鳴は青草で笠と蓑を作り神々に宿を頼んだが「お前の所業が汚らわしく追放され責められているのに、どうして私達に宿を頼むのだ」と断られ、留まり休むことも出来ずにひどく苦勞をして下つていった。しかし、この後に素戔鳴は「私を諸々の神は追放し、

界は昼夜の境がなくなった。その後、日神は復活したが月神はその罪により根の国へ追放され、苦勞しながら降りていく（ササラヲ）。しかし、もう一度高天原に上り日神に会い、潔癖を証明した後根の国へと赴く。

今までの考察に重なる、自然な流れではないだろうか。追放された後に再び、高天原に上つてくるのは月を追放しても月は天から消えることがないからであろう。さらに、付け加えるならば皆既日食が起こる時、月は新月の状態であり見えないが、また数日すると姿を現し天へと登る。

思うに、再び天へと登り天照と神生みをして天から下つた時点から月神と素戔鳴は、ほぼ分離したと考える。第六段、七段で語られる月神の持つ暴虐な性質はこれ以降、素戔鳴という別神へと移り、それ以外の月そのものの自然神、潮の満ち引きの神、生死を司る神（これはツクヨミも持ちつつも、素戔鳴にも引き継がれたという性格を持つ無名の月神が、高天原に残った。それは後に『ツクヨミノミコト』と呼ばれるに到ったが、素戔鳴と別れる前の月神の行動も全て素戔鳴で記紀に記されてしまったのではないか。こう考えれば、『ツクヨミノミコト』に神話がほとんど無いことも納得できる。

記紀以前において、素戔鳴はツクヨミであり、ツクヨミが死の世界を治めていたのである。



月を「生死を司る」と捉え、忌む思想は本来相当強いものだったと考えられる。しかし、時の流れ、太陽神を中心に据えた国家権力による排斥運動により「月」の力は次第に弱められていった。であるからこそ、上代文献での「月」は非常に僅かしか描かれていないのである。それに加え、月を愛でる中国文化を積極的に取り入れることで、「月」の恐ろしさはさらに弱められていった。しかし「生死」は人間にとって最も重要なものであり、平安時代に入り、月が愛でられる対象になったとしても「月」を死の世界と捉えつつけてきた古代日本人の思想が『竹取物語』の『月の顔みるは忌むこと』の一文を生んだのであろう。

△Ⅰ熊谷直春「月の顔見るは、忌むこと」私考『芸文東海』第一号 昭和五十八年六月

△Ⅱ吉田隆英「唐宋拜月考」『日本中国学会報』第三十四集 昭和五十七年十月一日

△ⅢⅠⅡに同じ

△ⅣⅤ山下春美『竹取物語』における月『竹取物語探求』第十五号 昭和五十九年十二月

△ⅤⅠⅡに同じ

△ⅥⅦ市村宏「月の顔は見るを忌むこと」『和歌文学の世界』和歌文学会 昭和四十八年七月三十日

△ⅦⅧ李家正文「月見を忌む思想について」『国学院雑誌』第八十七卷七号 昭和六十二年七月十五日

△ⅧⅨ倉野憲司「日本古典文学大系 古事記」岩波書店 昭和三十三年六月五日

△ⅨⅩ松田武夫「新釈 古今和歌集」風間書房 昭和五十年十一月十日

△ⅩⅠⅡに同じ

△ⅪⅡⅢ左側に太陽の下、舟を漕ぐ人と鳥、右側に月と蟾蜍、中央に星を吹き上げる流れが描かれた装飾古墳。

△ⅫⅢⅣゴンドラ型の船と月、星空の中を進む棺を載せた舟が描かれている装飾古墳。

△ⅬⅤⅥ舟を漕ぐ人と舳先で導く鳥が描かれた装飾古墳。

△ⅭⅮⅨ棺を載せた舟、馬を乗せた舟が描かれている装飾古墳。

△ⅰⅱⅲ橋純一「ツキヨミノ命とスサノヲノ命」『国語解釈』第二卷六号 昭和十二年六月一日

△ⅲⅳⅴに同じ

△ⅳⅴⅵ本居宣長『日本古典全集 萬葉集略解』日本古典全集刊行会 大正十五年三月七日

△ⅴⅶⅷ小島憲之他注『新編 日本古典文学全集 日本書紀』平成六年四月

△ⅵⅸⅹ大林太良『日本神話の構造』弘文堂 昭和五十年四月三十